これまで留萌市は、昭和五十七年度までは沖見町に、昭和〇〇年から現在まで浜中町の処分場に一括埋め立て方式で処理してきました。

生ごみも燃えるごみも資源ごみもみんな混合して投棄され放しだったことから、カラスの異常発生でカラス公害という言葉が出たことがありました。

風向きによっては、沖見町方面に臭気とともにごみが飛散してくることがままあったのは記憶に残っている方も多いのではないでしょうか。隣接する浜中運動広場が鳥のフンに悩まされたのもそんな前の出来事ではありません。

ごみ問題の大きな特徴は処分地の絶対涸渇ということであり、それに伴う処分地の遠隔化です。どんどん郊外に運ばれていく。当然投げ放しのときの処分は、周辺の地域に大きな影響を与えます。これから新しく処分地に決った藤山町の皆さんが長く問題指摘したこともそれまでの留萌市のごみ処理のあり方から考えると当然のことでありました。

ごみを出す人と片づける人そしてもっと広く言うとごみを棄てる地域の人と棄てられる地域の人間関係をどう築きあげるかが大切であることをしっかりと認識することだと思います。

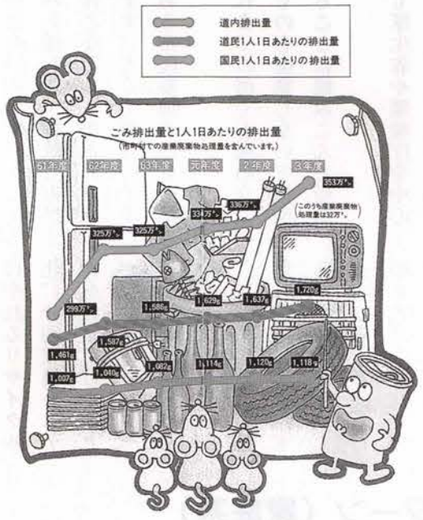
ごみの行方を追い、ごみの処理費用がどれほどになるか市役所はその情報をもっと市民に情報提供し知らせることがこれからは求められます。

これまでの反省の上に、留萌市は、平成9年に、新処理の稼動を目指して、藤山町で進められていきます。それと同時に今年度4地区目となる分別モデル地区事業のとりくみが平成九年度には、全市一斉となる予定です。

平成四年から始まったリサイクル化を目指すモデル地区事業には一、六五〇世帯およそ四、七〇〇人が参加しています。リサイクルできる品目を特定した強い方針を何回も地域懇談会等で協議して取り組まれ着実に効果を上げています。市役所も市民一人ひとりもごみの後仕末を考えずにどこかに押しつければいいという態度では、もう市民生活も街も成り立たないということを認識することが大切です。

ごみそのものに正面からぶつかること、市役所と市民が一緒になって真剣に、覚悟を決めて向うことが求められています。

留萌市は、六台の収集車によって毎日四十トン～四十五トンのごみを集めてきます。これを一年の量にすると約一万二千トンにもなります。もちろんこのごみ処理にかかるお金も莫大です。一般家庭と事業系を合わせて全体で二億三千万円ほど一年に支出されています。平成四年度から試験的に進めてきたモデル地区では積極的に分別収集を取り組みごみの再資源化の効果をあげています。これからの時代、環境のことも考えて全市で進める課題といえます。



ところで、市役所では毎年四月に全世帯にごみの出し方や時間等を載せたパンフレットを配布したり広報でお願いしていますが、やっぱり守れない人がいて困ります。早くに出したため犬やカラスに食い散らかされたり、悪臭の元になって苦情が寄せられることがあります。

地域の皆さんひとりひとりが協力し合い、モラルを守ることが大切です。

空きびんや、刃物など危険ごみは上書きするなどしてください。

リサイクル社会をつくろうと皆で目標をもつのなら、古紙、びん缶、牛乳パック、廃食用油などリサイクルできる品目を特定し、その20%～50%をリサイクルするぐらいの方針をもつべきです。又、私たちの日常生活の全分野でリサイクルし難い商品は買わない、受け取らないといった気持をもつことが必要です。ごみ総量の10%減などの低い次元に満足することなく、本当の意味でリサイクル社会をつくる強い意志が問われるのです。

市役所にとっても一大決心が必要となります。そして市民に対して大きな努力を求めることになります。市民にとっても、リサイクルの社会をつくりあげることがいいことだからやろう程度の善意や流行でもたらされることなく、そのことに向って、家庭の中で、職場で、地域で汗をかき身を削る努力が必要であることは